

象徴天皇制への転換と定着——皇室記者・藤樫準二の言説を中心に——

河西 秀哉

はじめに

二〇一六年七月、NHKのスクープによって明仁天皇の退位の意向が明らかとなり、翌月に天皇は退位の意思を強く示唆した「おことは」を発する。政府はそれを契機に特例法を制定、二〇一九年四月末に天皇は近現代史上初めて退位した。以上の経過からは、天皇がメディアを利用し、退位までもっていったかのように見える。

平成期、メディアにおける天皇の伝え方は天皇制という構造から天皇・皇后の人格を重視する方向性へと向かっていった^①。荻部直が天皇について「さまざま問題に直面し、

悩みながら自分の人生を歩んでゆく、等身大の個人の姿」と表現したことは大変示唆的で、象徴天皇制の現代的なあり方がうかびあがるとともに、メディアから伝わるイメージや具体的な人物像に対して私たちは何かを感じ、天皇制への意識を醸成していることがわかる。

本報告は、そのメディアと天皇制の関係性を考察する。両者は二〇世紀以降、本格的な繋がりを持つ。そこで興味深い人物が藤樫準二である。彼は一九二〇年に『萬朝報』宮内省担当となり、二五年に『東京日日新聞』へ移籍した後、『毎日新聞』で長年にわたり皇室を担当、多数の著作を残した。彼の足跡を見ることで、二〇世紀におけるメディアと天皇の関係の一端が明らかとなる。そこで本報告

では、藤樫の言説を中心に検討しながら、象徴天皇制への転換と定着過程を明らかにしていきたい。

1 萌芽的な大衆社会の成立から戦時期へ

メディアは日清・日露戦後の資本主義化によって急速に発達していくが、同時期には嘉仁皇太子の婚約・結婚や明治天皇の容態悪化・死去という天皇制をめぐるニュースも多かった。また、新中間層が増加する萌芽的な大衆社会が成立して人々の知りたいという欲求も高まっていた。そうした状況のなかで、メディアはニュースとなる素材を探しており、皇室記事もその一つとなった。宮内省はそのようなメディアに組織化を求め、それに加入しなければ情報を得られないような仕組みを整えた³。

一方、第一次世界大戦後の世界的な君主制危機とデモクラシーの日本への流入は、天皇制に切迫した危機感を与えた。また、大正天皇の病気が悪化したことから、裕仁皇太子を前面に押し出す必要性も生じた。こうした要因から、皇室と人々との関係性をいっそう緊密化し、天皇制を再編成しようとする動きが高まる。そこで、「平民的」な皇太子の姿を示しつつ、社会状況に対応して新しく変わった天皇制をアピールする戦略が採られた⁴。

メディアも宮内省から与えられた情報のみを報道していたわけではなく、積極的に新たな天皇像を打ち出そうとした。そして人々と皇室の結びつきを強調し、デモクラシーに対応した天皇制への変容を求めた主張を掲載していった。また、皇太子の資質・人格を評価する記事が掲載されるなど、メディア自身もデモクラシーを求める社会に適合した天皇制を構想し、それに基づいた報道を重ねていった。もちろん藤樫の記事でもある。

昭和天皇即位後もこの関係は継続するものの、次第に世間の風潮が変化し、メディアにとって窮屈な時代になっていく。しかしそのなかでも藤樫は積極的に天皇のまじめな人柄や「英明さ」、人々と変わらぬ日常性を描き公表していった⁵。彼は天皇の具体的なエピソードを描くことこそ、天皇制を伝えるメディアのあるべき姿と考えていた。

そして藤樫は一九三七年に『皇室大観』『聖上陛下の御日常』という書籍をあいっいで出版する。総力戦体制が構築され、日中戦争も勃発するなかでも、「皇室と国民の最も関係ある事項⁶」を記し、藤樫は書籍としてまとめた。国体明徴声明が発表されて天皇の神格化が進み始めた時期以後であるが、彼は天皇や皇族のエピソードを紹介し、人々の天皇制への興味関心を満たすような報道をしていたのである。第一次世界大戦後における皇室報道の経験が、そう

した「国体」の肥大する時期にあっても継続していたと言える。

しかも、両書ともに藤樫が所属する東京日日新聞社が発行しており、メディアとしてこうした天皇像を積極的に関人々に伝えていこうとする意図が見える。藤樫は天皇に関するエピソードを記し、模範的な人物であり、国家や国民のことを常に考える理想的な君主であると述べた。そして、その天皇の意思に因應するためにも自分たちが一致団結して国難に立ち向かわなければならないという旨の主張を展開していた。それまでと同じようなエピソードが展開されても、デモクラシーに対応する皇室像が強調される大正期、天皇を模範に戦争遂行に邁進することが主張される戦時期、その違いが見られた。そして戦時期は天皇個人の主体が浮き彫りにされ、人々が主体的に戦争に取り組む姿勢が問われる。総力戦体制を構築していくために、天皇・皇族に関するエピソードが紹介されていくのである。それはこの時期の「国体」が強調していた側面であるが、藤樫のようなメディアの営みが、敗戦後の人々の天皇の結びつきを期待される象徴天皇制にも繋がっていくことになる。

2 象徴天皇制の形成とメディア

アジア・太平洋戦争における敗戦は、天皇制とメディアの関係性を変えた。宮内省は、メディアの影響力によって昭和天皇の戦争責任の回避、天皇制の存続を図ろうとする。具体的には、藤樫ら皇室記者たちが天皇と会い話をする機会が与えられた。この様子は一九四六年一月一日に各紙で報道され、『毎日新聞』は二面に天皇写真と家族写真、いわゆる「人間宣言」の全文、藤樫による「拝謁記」を掲載する⁸⁾。その文章からは、天皇と会うことで「民主化」を体感する記者の姿が見えてくる。宮内省がそれまでの取扱いを変化させたことよって、藤樫は極めて素朴に「民主化」や「人間天皇」を体験し内面化していく。そして、いわゆる「人間宣言」と彼の「拝謁記」が同日に掲載された。また、このいわゆる「人間宣言」という言葉を最初に世間に認知させたのは、同年六月に発行された藤樫の著作『陛下の人間宣言』（同和書房、一九四六年）だと思われる。藤樫はこの著作によって、「人間」としての天皇像を人々に印象づけていった。そして重要なのは、この藤樫の著作が宮内省の意思によって書かれたものではないかと推測されることである⁹⁾。天皇の戦犯指名回避に向けての宮内

省の戦略として、天皇の「人間」ぶりを描く著作の出版が目指され、藤樫はその役目を担ったのである。天皇や皇后の「人間」的・家庭的なエピソードを書く報道手法は、大正期からの継続であった。

その後、藤樫ら皇室記者たちは自社の新聞記事のみならず、様々な媒体に天皇関係の記事を書き、著作を執筆した。彼らは中央のメディアだけではなく、敗戦後に数多く生まれた地域のメディアにも積極的に記事を掲載し、地域に新しい天皇像を伝える媒介者となっていた。彼らは「書きたい」というある種のジャーナリズムとしての感覚から、宮内省（宮内庁）に情報を求め、宮内省（宮内庁）も積極的にそれに応えていく。¹⁰

たとえば、一九四九年五月六月の九州巡幸後には宮内庁長官らによる記者会見を行い、その後記者と天皇との特別座談会を設けた。¹¹このように、宮内庁は天皇と皇室記者たちとの接点の場を提供し、それがメディアにとって天皇の様子を知り肉声を得る絶好の機会となった。一方の天皇側にとっても、そこでの発言がメディアに伝えられることを承知していたと思われる。このように、両者の共存関係を前提として、敗戦後の天皇に関する報道があった。皇室記者たちの報道は、宮内庁の手の届くなかでなされていた。一方で皇室記者たちは、天皇と直接触れ合う機会を得、

「民主化」を自ら体感していた。そして記者は、こうした自らの体験を読者に伝える使命を持っていたのではないかと藤樫が書いた「国民と辛苦を共に遊ばされる御日常生活のほども畏れ多き極み」食料輸入の「代償の一部として御手元の寶石類や美術品を提供しても差し支へなき旨の御内意」という記事は、「天皇から褒められた」という。¹²これは、側近からの情報を基にして天皇の思いを伝えたエピソード記事である。それを天皇も自身がどう描かれるのかが気にしていた。まさに共存的な関係性ゆえに生まれた記事だったのである。

3 象徴天皇制の定着とメディア

その後、次第に天皇に関する報道は減少するものの、それと反比例するかのようになり、一九五一年に成人となった明仁皇太子への注目が高まっていく。彼に関する報道の様相は、大正期の裕仁皇太子の時の再現とも言える状況であった。藤樫は記者として現役を退いていたものの、こうした連続性を語る上では適任ともいえ、たびたび紙面に登場していた。

藤樫の皇太子への言及は、天皇・皇后の「人間」的エピソードと同様の文脈のなかで語られ、「新日本の理想的な

民主天皇としての「人間皇太子の完成」に万全を期してゐる」と、講和独立における「新生日本」というナショナルリズムの代表としての皇太子の存在を浮かび上がらせている。日本国憲法との親和性、「新生日本」としての再出発と青年としてこれからを担う皇太子が適切なイメージで語られる点では、敗戦後の独自性とも言える。

そのなかで一九五三年三月から一〇月にかけて、エリザベス女王の戴冠式出席を中心としたヨーロッパ・アメリカなどへの皇太子訪問が実施された。藤樫ら記者も同行、皇太子の一挙手一投足を報じた。こうしたメディアに対し政府もその重要性を意識し、それへの便宜を図っていた。これには宮内庁の意向もあったと考えられる。では報道する藤樫ら皇室記者たちはどのような感覚を持っていたのか。

紙面に載せるのに、行事的な写真は飽きていますよ。

それで、殿下の人間性につながるような写真が欲しくなるんでね。たとえばスイスで、イタリーの女性とテニスをなさいましたね。こういうのは、記者側でも何となく扱いたくなるし、読者にも、ほ、えましい光景としてむしろ親しみ深いんじゃないかと思うね。もつとも、その女性とテニスをしたからといって、特別どうということもないんですがね。

ここでは、皇太子のエピソードを欲したがる人々の心理

を彼らがつかまえている様子がよくわかる。自分たちの報道が事実かどうかは別として、読者が喜ぶ皇太子像を示そうとする姿勢とも言えるだろう。大衆社会のなかで、人々の欲求やその欲望をいかに満たすのか。メディアは皇太子を中心とした皇室記事でもそうした観点から報道していた。これは、外遊前後から展開される皇太子妃選考報道でも同様であった。一九五〇年代には新聞社系週刊誌が創刊され始め、その後、出版社系週刊誌へと続いていく。それらは従来からあった新聞との記事の差異化が図られ、皇太子妃選考報道では候補者が乱立、彼女たちのプライバシーが暴かれた。大衆社会に対応して、天皇制がある種の「消費」の対象になっていったのである。そうした状況について藤樫は次のように語っている。

とにかく現在はまだそういうあれじゃないですね。おそらく陛下は、——終戦直後から苦勞は国民とともにあるとおつしやつてるんですから、そういう時代に国民の生活とはなれた許婚者を早く息子に世話するということとは、ちよつと考えられないんです。／皇太子さまにしても学生として御自覚なさつていれば、早く嫁がほしいということはおそらく云わないだろうと思うんです。だから周囲があまりにも騒ぎすぎてると思うんですね。(は改行)

ここでは、天皇が国民生活を意識している状況を強く印象づけている。これはこの時期の藤樫の他の文章でも同様であり、彼が一貫して持ち続けていた姿勢であろう。そして藤樫は、皇太子についてもまじめな人格を強調する。彼自身、前述した人々の欲求に応えるかのような姿勢を持ちつつも、過熱化、「消費」化する報道のなかで、あくまで「人間」的な皇太子像、戦前のように「仁慈」をもつ天皇像を志向していたのである。

一九五八年一月、皇太子と正田美智子の婚約が発表され、ミッチーブームが起きた。その最中に出版された藤樫の『千代田城』（光文社、一九五八年）はベストセラーとなった。そのなかで藤樫はブームの大きな要因となった恋愛言説についてはその前提を認めつつ、歯止めのような言説も展開している。あくまで「人間」として皇太子の性格に言及し、それへの敬愛を求めている。ブームが落ち着いた後も藤樫は皇太子夫妻への期待感を込めた言説を発し、その後には昭和天皇と孫たちの関係性にフォーカスを当てる文章を発表し続けていく。そこでは、「人間」としての天皇の性格を強調するとともに、三世代にわたっての「皇室御一家」としてのイメージにあふれていた。一般的な家庭と同じのようでありながら、国民のことを常に考えて行動する天皇たち。理想的な家族のモデルである。そうした象徴

天皇制の姿が藤樫の文章のなかでは展開されていた。

おわりに

近現代、メディアと天皇制は緊張を孕みつつも、共存関係にあったと思われる。大正期の世界的君主制の危機、アジア・太平洋戦争敗戦後の昭和天皇の戦争責任という問題のなかで、天皇制はメディアを利用してそれらの問題の克服を図ろうとした。一方のメディア側は近現代の大衆社会に対応した報道を展開し、皇室の「平民化」「民主化」を報じていく。そこには、大衆の欲求に応じた消費的な潮流とともに、メディア自身も自身への扱いの変化に「民主化」を見、人々と同じような感覚を有していた側面もあった。そして、それを伝えなければならぬというジャーナリズムの信念をも有していた。

メディアは天皇や皇太子の人物像への注目によって、イメージを具体化し、人々に身近であることを意識化させようとした。それは第一次世界大戦後であればデモクラシーに適合的な皇室像、戦時期であれば主体的に総力戦体制に取り組み模範としての天皇、占領期であれば戦争責任回避としての「人間」像、高度経済成長期であれば恋愛やこの時期の家族のモデルとしてのあり方を求めたのである。メ

ディアはその際、天皇や皇太子のエピソードを積み重ねることではイメージをより具体化し、記事を量産した。そうした姿勢は、その後の平成の天皇・皇后に対する報道へと延長していくことになる。

注

- (1) 河西秀哉『平成の天皇と戦後日本』（人文書院、二〇一九年）一五七～一六一頁。
- (2) 荻部直「いま、天皇について語ること」（『大航海』四号、二〇〇三年）一三八頁。
- (3) 河西秀哉『天皇制と民主主義の昭和史』（人文書院、二〇一八年）七〇頁。
- (4) 坂本一登「新しい皇室像を求めて」（『年報近代日本研究』二〇、一九九八年）七～三五頁。
- (5) 藤樫準二「皇室と新聞」（『文藝春秋』第一三卷第七号、一九三五年）一三六～一三九頁。
- (6) 藤樫準二『皇室大観』（東京日日新聞社、一九三三年）一頁。
- (7) 『徳川義寛終戦日記』（朝日新聞社、一九九九年）一九四五年二月二二日条。
- (8) 『毎日新聞』一九四六年一月一日。
- (9) 高橋紘「人間天皇演出者の系譜」（『法学セミナー増刊

天皇制の現在』日本評論社、一九八六年）一四五頁。

- (10) 『藤井恒男遺稿集 あの時この人』（非売品、一九八四年）六七～六八頁。

- (11) 『入江相政日記』（朝日新聞社、一九九〇年）一九四四年六月二八日・七月五日条。

- (12) 『毎日新聞』一九四五年二月一日。

- (13) 「大正から昭和二十年代」（日本新聞博物館蔵「藤樫準二コレクション」所収）。

- (14) 藤樫準二「若い希望の象徴わたくし達の皇太子殿下」（『婦人の国』第一卷第四号、一九四七年）一九頁。

- (15) 河西前掲『天皇制と民主主義の昭和史』一九五～一九七頁。

- (16) 藤樫準二ほか「座談会 青年皇太子さまの御外遊秘話」（『婦人倶楽部』第三四卷第一四号、一九五三年）七七頁。

- (17) 藤樫準二ほか「座談会 宮廷秘帖」（『面白倶楽部』第七卷第一号、一九五四年）八一頁。

- (18) 藤樫準二ほか「特別座談会 日本の新しい希望 浩宮さま」（『主婦と生活』第一八卷第一号、一九六三年）一一四～一二〇頁など。

（名古屋大学准教授）